



北海道・東北農業法人 WEEK2009 in 北海道

『農○連携力の未知なる可能性』

北海道・東北の農業法人参加のもと開催される「北海道・東北農業法人WEEK」は、各地の事例研究や情報交換を通じて交流を深め、農業

経営のより一層の活性化に資することを目的に毎年各道県の持ち回りで開催されている。7月9～10日に北海道で開催された今回のイベントの様子を、同イベントを主催した北海道農業法人協会WEEK2009実行委員会の岩井宏文氏にレポートしていただいた。

今回の「北海道・東北農業法人WEEK」では、総勢155名の生産者や関連企業・団体が参加し、「農○連携力」をテーマに活発な意見交換がなされた。特に、昨今のわが国における農業を基軸に広がりつつある「農商工連携」や、「農と都市の連携」、「農林漁業の一次産業間連携」、「海外との連携」など幅広い連携に着目し、単なるブームではなく、次を担う農業の第一歩となる課題認識や方向性の共有が図られる有意義な会となった。

基調報告は、「銀聖プロジェクトから見える地域資源と連携の力」と

題し、日高定置漁業者組合「銀聖」プロジェクト委員会委員長の佐藤勝氏（有菱栄協栄水産代表取締役）からいただいた。

「銀聖」は、体重3・5kg以上の大型の銀毛の鮭のブランドネームだが、これは全体の水揚げの4%程度しか獲れない最高級の鮭だ。

獲る漁業、育てる漁業、伝える漁業への地道な取組みとともに、湧水が湧き出る漁場づくりのための森づくりへの取組などが紹介された。

このような取組が結実し、「銀聖」ブランドは、普通の鮭が300～400円/kgのところ、2～3倍で取引されるほどにまで評価が上昇している。

「基幹産業でありながら農業と漁業は連携してこなかった。未来の子どものためにも、国民の食卓を守る観点からも、そして自らの経営の生き残りをかけ、今こそ生産者

が手を取り合わなければならない」佐藤氏からは一次産業連携への強いメッセージをいただいた。

続いて、「農業」から「食業」、そして、「農村産業」創出（オンリーワン産業の構築システムを目指して）と題して、2008年日本農業賞大賞者、（有）伊豆沼農産社長の伊藤秀雄氏から事例報告をいただいた。

伊藤氏は宮城県農業法人協会会長、（社）日本農業法人協会副会長を務めており、「農業」（＝生産）から「食業」（＝販売を含む）へという発想の転換から農村産業の創出につな

イベント開催データ

- 開催日時
2009年7月9日(木)、10日(金)
- 開催場所
京王プラザホテル札幌
(札幌市中央区北5条西7丁目)
- 主催
北海道東北各県の農業法人協会、
(社)日本農業法人協会
- 共催
日本政策金融公庫 札幌支店・帯広支店・北見支店 農林水産事業、北海道担い手育成総合支援協議会
- 協力
北海道中小企業家同友会札幌支部農業経営部会
- 後援
農林水産省北海道農政事務所、北海道



1「農漁連携」について語った日高定置漁業者組合「銀聖」プロジェクト委員会委員長の佐藤勝氏。
 2「農村産業」創出についての事例報告をいただいた(有)伊豆沼農産社長の伊藤秀雄氏。
 3春まき小麦栽培についてご報告をいただいた江別麦の会代表・片岡弘正氏。



げる社会システム構築に挑戦されている。
 鹿兒島や香港を舞台とした「伊達の純粋赤豚」の販売・情報戦略を通じて登米・伊豆沼地域の知名度を高める一方、地域を挙げての環境保全

や「あるもの探し」による魅力づくりに取り組み、都市住民の誘導を図る活動を展開している。
 検食による農産物の品質維持、商品販売情報の国内外からの逆輸入、地域住民の参加による集客や農村産

業創出、これらは有機的に経営および地域活性の循環サイクルを形成しており、原動力としての伊豆沼農産の役割に大きな示唆をいただいた。

引き続き、「小麦がつなぐ連携力」春まき小麦栽培技術の確立と活動の歩み」をテーマに、江別麦の会代表の片岡弘正氏にご報告をいただいた。
 片岡氏は、パンへの適性が高く評価されている春まき小麦「ハルユタカ」の初冬まき技術構築に尽力され、2008年日本農業賞大賞を受賞している。
 「ハルユタカ」は1985年に開発されたが、病気に弱く、手間がかかることから敬遠されていた。しかし、1992年、時期を早めて積雪直前の11月に種をまくことに挑戦、初年度から、北海道の春まき小麦の平均

約200kg/10aをはるかに上回る643kg/10aと、実に3倍の収穫量となった。
 1998年には、麦の生産振興を図るため、生産・加工・流通・消費・研究などに関わる各分野の交流を深めることを目的に「江別麦の会」が発足。ラーメンを主体とした麺用と、パン用小麦粉の用途開発が開始された。少量ロットの製粉機や、讃岐うどんの手打ち技術にヒントを得た製麺機の開発など、ハード面での環境づくりも進み、地場約20店舗、100種類ものレシピに及ぶ「江別小麦めん」がブレイクしている。

今回のセミナーの総括となる「農連携力の未知なる可能性」に関するグループディスカッションでは、参加者が14のグループに分かれ、そ



多様な連携がもたらす無限の選択肢とそれに対する果敢な挑戦への決意とともに、「消費者」との相互理解や信頼の関係づくりを促す「農消連携」が、多くの班の共通点として見出された。一方で、連携を調整する人材の不足への指摘も多く、マネージメント役としての法人協会の役割についても提起された。

ススキノの夜に北海道弁と東北弁が飛び交う非常に盛り上がる会となったことをご報告するとともに、次年度開催の青森県にバトンをお渡ししたい。

セミナー後半には、農業と何か連携することで生まれる可能性についてグループに分かれて意見交換し、結果を発表していただいた。

それぞれの取組や考え方について意見交換を行なった。

多様な連携がもたらす無限の選択肢とそれに対する果敢な挑戦への決意とともに、「消費者」との相互理解や信頼の関係づくりを促す「農消連携」が、多くの班の共通点として見出された。一方で、連携を調整する人材の不足への指摘も多く、マネージメント役としての法人協会の役割についても提起された。

ススキノの夜に北海道弁と東北弁が飛び交う非常に盛り上がる会となったことをご報告するとともに、次年度開催の青森県にバトンをお渡ししたい。